〔研究ノート〕

ロマン・インガルデン（1893, 2, 5—1970, 6, 14）哲学について（I）

武井勇四郎

1　略歴と仕事
2　主要著作年譜（1919—1977）
3　D. Gierulanka 女史の
　　インガルデン哲学の概略図
　　——（以上，本稿）

1　略歴と仕事

ロマン・インガルデンはポーランドの古都クラクフ市の知的家庭に生まれた。父はクラクフのワーヴェル城下を流れるヴィスワ河の航行，水質を研究し，水道工事を行ったクラクフの著名な功労者であった。祖父は建築学者であった。インガルデンは祖母がルヴフ市（現在ソ連領）に居住していた関係上，ルヴフの古典ギムナジウムに学び（1903—1911），続いてルヴフ大学（Jan Kazimierz 大学）に入学し，哲学と数学を学んだ。この大学にはポーランドの哲学の父にしてフッサールにも影響を与えた K. トワルドフスキ（1866—1938）がいた。しかし，インガルデンは，この大学の在学を一年間にとどめ，1912年ドイツのゲチンゲン大学に留学した。ここには『厳密な学としての哲学』（1911）発表直後の E. フッサールが講壇に立っていた。フッサール現象学がインガルデンに決定的影響を及ぼし始め，帰国の1918年まで師フッサールと深い親交を結ぶことになった。この大学で G. E. Müller の心理学，D. Hilbert の数学も聴講し

た。フッサール哲学の聴講で，厳密な学としての哲学を自分の哲学のあり方とすると同時に，実証主義者のとるミニマムリスムス的方法に対して，全世界を研究対象とするマクシマムリスムス的方法を自己の研究方法にした。インガルデンの全哲学の基調をなしている壮大な存在論の構想はここに由来している。

1913年，フッサールの『イデーン』一巻が発表された。当時のフッサール学徒には一つの驚きの念を喚び起した。リアリスムス的色調の『論理学研究』からみて『イデーン』は超越論的イデアリスムスへの移行と映ったからである。インガルデンは師から多大の学恩を受けるものの，師の超越論的イデアリスムスに対して当初から強い疑念を抱き，批判的態度で臨まざるを得なかった。

1914年第一次大戦の勃発によりフッサール学徒の多くは戦場にかりたてられたが，ポーランド人であるインガルデンはそのまま研究を続けることが出来た。師がフライブルグ大学に移籍した時にも，師の後を追い師の下で博士論文「ベルグソンにおける直観と知性」(1916/17) を書いた。ベルグソンの時間論にたいするインガルデンの見識の深さが，師フッサールを驚かせ，これがきっかけとなって講義後必ず帰宅まで師と討議を重ねた (1916/17)。この頃からインガルデンはフッサール学徒の中で最高の知遇を受けるようになった。師の弟子にたいする深い信頼は死まで変らなかった。

1918年インガルデンは旧師トワルドフスキのいるルヴフ大学に戻ったが，すぐには職につけずルヴリン，ワルシャワ，トルン各地のギムナジウムで数学，物理学，哲学の教鞭をとった。かたわら無前提の認識，絶対的認識の考察に取り組んだ (「認識論における Petitio Principii の危険について」1921)。そして1924年教授資格論文として「哲学体系における認識論の位置」を書き，25年から助教授としてルヴフ大学の教壇に立った。

博士論文，教授資格論文，Petitio Principii 論のいずれも認識論で，不可疑的内在知，他の諸学に依存しない知，自己確証知を扱っている。この点でインガルデンは自己の哲学研究を認識論から始めた。しかし，インガルデンは構成された意味を拡大して実在的対象にまで及ぼす師の見解に疑義を感じ，急

遽，対象の存在とその様式を扱う存在論的問題に立ち向うことになる。「本質的問い」(1925) はその皮切りである。インガルデンはこの時から哲学史上2000年来の最大の課題「イデアリスムス・リアリスムス」に取り組む決意を固めた。この問題の素描を「イデアリスムス・リアリスムスの問題覚書き」としてフッサール70歳記念論集に載せ (1929)，師の超越論的イデアリスムス克服の道を開いた。

インガルデンは実在世界の存在や存在様式の問題に認識論的に接近することの不毛性に気付き，存在論的問題を認識論的問題から断絶した。存在的存在論⟶形相的存在論⟶質料的存在論⟶形而上学（これは通常の意味と異なり，インガルデンにとっては事実学に関係する）という，いわば純粋可能性から具体的個物の世界へという，従来の経験主義的方法と全く逆のユニークな構想を打ち立てた。この構想はインガルデンの半世紀にも及ぶ活動の課題となった。後にこれは『世界の存在をめぐる論争』という巨作として結実する。そして存在論はインガルデン哲学の全業績の基盤をなしている。もろもろの問題はここから流れ出る。

在存的存在論において 1）絶対的存在，2）実在的存在，3）純粋志向的存在，4）理念的存在の四つの存在が導出された。この中まず 3）の純粋志向的存在の基礎付けから始めた。インガルデンは1927年パリに10ケ月ほど滞在し，翌年に『文学芸術作品論』を脱稿した。文学芸術作品を純粋志向的存在様式と規定した。この著作でインガルデンは芸術理論家として浮び上ったが，彼をこれにとどめることは彼の意図からしても正しくない。イデアリスムス・リアリスムス問題の解決の一環にすぎないからである。

1933年，ルヴフ大学でドイツ文学論の教授となる一方，当時支配的であった論理実証主義に対して決然たる態度をとった。就中，第 8 回国際哲学会(1934，於プラハ) で言語の物理主義的考察を批判に付した。ポーランドでは L. Chwistek, T. Kotarbiński と争った。1935年 „Studia Philosophica“ 年報を創刊し，48年迄編集委員を勤めた。この年報に「個体の形相的構造」(1935) を載せ，決

して意識によって構成されることのない実在的個体の自律性を説く。

純粋志向的対象については，『文学芸術作品論』から更なる問題が生じた。文学芸術作品と享受者（読者）との関係である。『文学芸術作品論』(1931) は作品論であり，その構造を四つの層——語音層，意味層，情景層，描かれた対象層——のポリフォニーとして解析されている。それに対して『文学作品認識活動論』(1937) は，読者の読書構造（美的体験，具象化活動，美的価値の形式等）を現象学的に記述している。いわゆる美学である。この二著は姉妹編をなし，純粋志向的存在様式を完璧に基礎づけている。

『文学芸術作品論』はドイツ語で出版され，一部の人には知られたがナチスの文化政策のため普及することが出来なかった。『文学作品認識活動論』はポーランド語で発表されたため，インガルデンの美学の断片しか西欧に知られなかった。インガルデン美学の全容が，母国においても外国においても知られるようになるのは60年代以降である。というのは『文学芸術作品論』のポ訳は1960年に，『文学作品認識活動論』の独訳は1968年に出たからである。

1938年，トワルドフスキ，フッサール共に他界した。と同時にポーランドには苦悩の歴史が始まる。ナチズムの嵐が荒れ狂い第二次大戦を待つばかりとなった。ポーランドの各大学は次ぎ次ぎと閉鎖され，ルヴフ大学も例にもれなかった。すぐれた学者が強制収容所に収監された。この条件にもめげず，ルヴフ大学に地下大学が開かれ，戦中，インガルデンも文学理論を講じたが，しかしもはや講義する落着いた時代ではなかった。インガルデンはこの悪環境のただなかでまことに超人的な強靱な思索を揮り絞ったのである。1941年9月から1945年1月まで，出版の当てもなく約2000頁にも及ぶ存在論『世界の存在をめぐる論争』一二巻を執筆した。それは戦後刊行されたが，それは先きの「イデアリスムス・リアリスムスの問題覚書き」の構想の具体化であった。存在的存在論と形相的存在論を仕上げた。一巻 存在的存在論において四つの存在契機——存在自律・存在他律，存在本源・存在派生，存在独立・存在非独立，存在依存・存在非依存——の数学的組合せから無矛盾の存在様式を導出し，それに

時間を加味して，絶対的超時間的存在，外時間的理念的存在，時間に規定された実在的存在，純粋志向的存在の四つの存在様式を導出した。これを基に，形相的存在論では，自律的個体の形相，純粋志向的対象の形相，理念の形相，関係の形相，存在的独立的対象の本質，同一性の問題，世界の形相，純粋意識の形相等が論じられた。

この戦中の巨編がポーランド語で発表されたことは，インガルデン哲学の理解を非常に遅らせる結果を招いた。これがドイツ語版となって西欧文化圏に入るのは約20年後である。

『文学芸術作品論』，『文学作品認識活動論』，『世界の存在をめぐる論争』は，インガルデンのルヴフ時代の成果である。インガルデン哲学のおおかたはこの時代に出来上っている。

大戦後，クラクフ時代が始まる。

戦後，ポーランド文化に由緒深いルヴフはソ連領となってしまった。インガルデンは生まれ故郷クラクフ市に引き上げなければならなかった。主要な蔵書は持ち帰れたが，大学の講義録はすべて焼失した。

1945年2月クラクフ市のヤギェウォ大学が開講した。クラクフ市は戦災を免れた。1946年6月からこの大学の哲学教授として迎えられた。外国の諸大学からの招聘にもかかわらず，1963年の引退までこの大学を離れなかった。ポーランド哲学建て直しのため実践的にも活動を始めた。ポーランド科学アカデミー通信会員（1945），„Kwartalnik Filozoficzny“ の編集員（1948），クラクフ哲学者協会会長，古典哲学出版委員（1945）等の役職についた。1950年まで，認識論の課題，古代近世哲学史概説，対象の形相論，科学方法論，論理学入門，外的知覚の客観性の問題等々の講義をした。外国からもインガルデンの教を乞いに幾人か集った。

しかし，間もなく大戦中の苦難にまさるともおとらぬ試煉の時代が訪れる。スターリン主義の支配であった。1950年，インガルデンは生活から遊離した観念論者という不当な烙印をおされ事実上追放の憂き目に会った。一時ワルシャ

ワ大学の正教授となっていたものの講義は許されなかった。スターリン批判後の1957年まで続いた。この期間転向もせず自説もまげず沈黙で抗し，マルクス主義に対しては超然たる禁欲主義で通した。この間古典哲学出版委員の地位を利してカントの『純粋理性批判』の翻訳（1957）に従事し，その副産物として学術文献の翻訳と文学作品のそれとの違いを論じた『翻訳論』（1955）を書いた。

他方，この仕事のかたわら『世界の存在をめぐる論争』の第三巻として『実在世界の因果構造』(1950/54) を今度はドイツ語で書き進めた。これは世界の同一性を保証する主要な存在連関としての因果関係の存在論的究明であり，質料的存在論とも重なり合っている。しかし，これは死後出版（1974）となった。『世界の存在をめぐる論争』一巻二巻三巻共に試煉の時代の所産であることは，ポーランド人の抵抗の精神を示してあまりあるように見える。

ルヴフ時代の一年半ほどのうら若い教え子が戦後ポーランドを去った。彼女はスターリン時代に『ロマン・インガルデン哲学の素描』(1955)，『本質と存在，ロマン・インガルデンとニコライ・ハルトマンの哲学研究』(1957) をフランス語で発表した。そしてインガルデン生誕65歳記念論集「ロマン・インガルデンに捧ぐ。九つの現象学の論文」(1959) の巻頭論文で，彼女はインガルデンをフッサール現象学の正統な嫡子者とし，彼の現象学のリアリスムス的性格の故に，「第二現象学」と命名した。彼女は，現在，Analecta Husserliana を刊行編集している A. T. Tymieniecka 女史である。しかし，当時インガルデン哲学の普及は思うにまかせなかった。インガルデンは国際学会から姿を消したからである。

1957年，インガルデンは復権した。と同時にポーランド哲学界にとって慶賀すべきことに，彼の哲学選集の刊行が始まった。まず最初に『美学研究一巻』(1957) から始まり，現在までに11巻出ている（著作年譜末尾を参照のこと）。『美学研究二巻』(1958) に「絵画論」(1946)，「建築作品論」(1946)，「音楽作品論」(1933)，「映画論」(1947) の各芸術部門の存在論的考察が収録されたことは注目に価する。1931年の『文学芸術作品論』の基本的考えをこれら各部門に及

ぼしたのである。後にドイツ語版『音楽，絵画，建築，映画の芸術存在論研究』(1962) となる。

スターリン主義批判によるインガルデンの復権までの彼の主要な独自の成果は『実在世界の因果構造論』と『音楽，絵画，建築，映画の芸術存在論研究』である。

復権から死までの約10年間は，つまり60年代はインガルデン哲学の中で一時期を画する。第一に価値論一般に着手したこと，第二にフッサール批判に取り組んだこと，第三にいままで放置しておいた認識論に再度いどんだこと，第四に主要なポーランド語版を極力ドイツ語版に書き換えたこと，第五に国際会議に精力的に参加したことである。

価値論は『文学芸術作品論』と『文学作品認識活動論』における問題意識から生まれている。「芸術的価値と美的価値」(1964)，「美的に重要な質の系の問題」(1965)，「美的価値とその客観的基礎付け」(1957) はそれをめぐるものであるが，他方，インガルデンは道徳的価値に深入りし，『責任論』(1970) を発表した。この研究途上で価値一般における未解決な問題を「価値について我々は何を知らないか」(1966) の中で提示し，今後の研究指針にしている。しかし，次のフッサール哲学批判と比べると，インガルデンの価値論はまだ研究途上でまとまりに欠けている憾がある。

インガルデンは師フッサールの下で勉学している時から，師の超越論的イデアリスムスへの傾斜に批判的であり，帰国後も何通かの書簡でフッサールに疑義を質している。しかし当時，正面切ってフッサールの著作を批判の俎上にのせることはしなかった。師フッサールが弟子インガルデンに『デカルト的省察』のコメントを求めた時 (1934)，一回目には応えたが，二回目からはことわった。丁度，『文学作品認識活動論』(1937刊) を執筆していたからである。しかし，インガルデンは戦後，積極的にフッサール哲学の批判に取り組んでいる。「E. フッサールにおける超越論的イデアリスムスについて」(1959)，「フッサールにおける構成の問題と構成的考察の意味」(1959)，「フッサール哲学発展

の主要位相」(1963),「フッサールを超越論的イデアリスムスに導いた動機」(1963),「物体構成のフッサールの考察」(1963), 1967年のオスロ大学における「フッサール現象学入門」の講演(後に『フッサール現象学入門』ポ版, 1974),「フッサールの最後の著作における新しいものは何か」(1970) などはこれである。特に『現代哲学研究』(1963) に収録されている「フッサールを超越論的イデアリスムスに導いた動機」は, インガルデンのフッサール現象学観が直接出ているので重要な論文である。勿論, インガルデンのフッサール現象学批判は, インガルデンの全著作の中で見られるべきである。

既述したように, インガルデンは自己の哲学を認識論から始めたが, 実在世界の存在をめぐって, 急遽, 存在論に切り換えた。しかし, インガルデンはこれを決して放棄したわけではない。認識論そのものを扱わなかっただけである。1937年の『文学作品認識活動論』は, 読者の作品の認識構造を扱ったものである。しかし, 概して認識論は晩年まで脇にとり残された。『文学作品認識活動論』を1968年にドイツ語版で大幅に増訂したことはこの問題への再帰である。「美的価値判断」(1958),「美的体験の認識的考察」(1961) は美学的認識論である。色々な仕事をするかたわら, インガルデンはついに認識の哲学的基礎付けに着手し, I 心理学的認識論, II 記述的現象学的認識論, III アプリオリ現象学的認識論, IV 論理学的認識論, V 自律的認識論の大構想を立てた。『認識論基礎一部』(1971) が出たが, 彼の突然の死で III の途中で未完となった。とりわけインガルデンの独自の見地とみられる自律的認識論の草稿ができ上らなかったことは惜まれる。

ポーランド語は西ヨーロッパ人にとって近づき容い言葉ではない。ポーランドでは著名な論作がしばしば英語版で出版されるのはそのためである。インガルデンはドイツ語を自由に駆使した。フッサールに見てもらいたかったがために『文学芸術作品論』をドイツ語で書いた。母国語ポーランド語で書けば, 自己の思索が国内にとどめられることも知っていた。『文学作品認識活動論』をポーランド語で書いたがために, 自分の美学が全体としてヨーロッパに伝わら

なかったことも痛感していた。60年代始めインガルデンはドイツ語版をつくるべきか否かに悩んだが，1963年大学引退後，主要な著書のドイツ語版作製に踏み切った。これも背負わなければならない仕事の一つとなった。以下はインガルデン自筆の著作である。

Untersuchungen zur Ontologie der Kunst.: Musikwerk. Bild. Architektur. Film. (1962)

Der Streit um die Existenz der Welt.

Bd. I Existenzialontologie. (1964)

Bd. II/1 Formalontologie. (1965)

Bd. II/2 Formalontologie. (1965)

Vom Erkennen des literarischen Kunstwerks. (1968)

Erlebnis, Kunstwerk und Wert. (1969)

国際会議や講演に積極的に出向いて報告や長期の講演を行っている。ヴェニス，パリ，アテネ，ロンドン，オスロ，ウィーン，アムステルダムなどの国際会議に参加した。会議出席のたびに新しい報告，新しい課題を提出していることが注目に価する。

1958年 ポーランド科学アカデミー会員

1966年 Jurzykowski 賞（アメリカのポーランド芸術科学研究所）

1968年 Herder 賞　於ウィーン大学

1970年6月14日永眠　享年77歳

参考文献

Fenomenologia Romana Ingardena. Wydanie specjalne „Studiów Filozoficznych“ 1972 Warszawa

Szkice Filozoficzne Romanowi Ingardenowi w darze. 1964 Warszawa — Kraków

For Roman Ingarden Nine Essays in Phenomenology. 1959 'S-Gravenhage Martinus Nijhoff

D. Gierulanka: Roman Ingarden (5 II 1893—14 VI 1970), Roman Ingarden (1893—1970), w Nauka Polska nr. 6. 1971, The Philosophic Work of Roman

Ingarden (A Systematic Outline), in „Dialectics and Humanism“ No. 4/1977

M. Gołaszewska: Roman Ingarden (5 lutego 1893—14 czerwca 1970), Pamiętnik Literacki 1971 2. 1

Uczczenie pamięci Romana Ingardena (1893—1970) / W. Tatarkiewicz, D. Gierulanka, A. Półtawski, W. Stróżewski/, w Ruch Filozoficzny tom XXX Toruń 1972

Stiftung F. V. S. zu Hamburg Gottfried-Von-Herder Preis.

その他多数。

尚，筆者はクラクフ市ヤギェウォ大学哲学研究所留学中（1977年度），インガルデン未亡人ヌーナ夫人，息子 Janusz Ingarden（第三子，建築技師），D. Gierulanka 女史，ヤギェウォ大学助教授 W. Stróżewski，ワルシャワ神学院 A. Półtawski，Analecta Husserliana 編集主幹 A. T. Tymieniecka（ヌーナ夫人弔意訪問の際，ヌーナ夫人は1978, 1, 2 に亡くなった）に接し，インガルデンについて色々と話を伺った。ここで厚く謝意を表する。

尚，連載「ポーランド通信」全11回でインガルデン哲学に多く触れた。参照されたし。日本読書新聞，52年6月13日号，7月4日号，8月8日号，9月5日号，9月26日号，10月17日号，11月7日号，11月21日号，53年1月1日号，1月23日号，2月6日号

2　主要著作年譜（1919—1977）

主要な著作および重要な論文のみを収録する。雑誌名，出版社名は必要なもの以外すべて省略する。

ロマン・インガルデンの文献集録が弟子 Andrzej Półtawski 氏によってなされた。

1) Szkice filozoficzne Romanowi Ingardenowi w darze. PWN, Warszawa—Kraków 1964　1915年から1963年まで。

2) Studia z estetyki. tom 2 PWN, Warszawa 1966　1915年から1965年まで。

3) Fenomenologia Romana Ingardena. Wydanie specjalne „Studiów Filozoficznych“ Warszawa 1972　1915年から1971年まで。

尚，Das literarische Kunstwerk, Vierte unverändert Auflage 1972の巻末にも簡単な集録がある。

筆者はこれらの資料を借用すると同時に現時点までのものをポーランド留学中（1977年度），クラクフ市ヤギェウォ大学哲学研究所，ヤギェウォ大学中央大図書館，ポーランド科学アカデミー・クラクフ支部，インガルデン未亡人ヌーナ宅，息子 J. インガルデン宅，ギエルランカ女史宅で蒐集した。

尚，すべてオリジナルな題名，書名にとどめ，ポーランド語表記のみ邦訳した。著作本には『　』で，論文には「　」で示す。

1919

1　Dążenia fenomenologów.「現象学者の狙い」『現代哲学研究』1963に増補収録

1921

1　Intuition und Intellekt bei Henri Bergson. Darstellung und Versuch einer Kritik. Jahrbuch für philosophie und Phänomenologische Forschung Bd. 5 Halle　収『現代哲学研究』1963 ポ訳

2　Über die Gefahr einer Petitio Principii in der Erkenntnistheorie. J. f. ph. u. phän. F. Bd. 4 Halle　収『認識論基礎一部』1971ポ訳

1922

1　Max Scheler.　収『現代哲学研究』1963

1925

1　Über die Stellung der Erkenntnistheorie im System der Philosophie. Halle 収『認識論基礎一部』1971ポ訳

2　Essentiale Fragen. Ein Beitrag zum Problem des Wesen. J. f. ph. u. phän. F. Bd. 7 Halle　収『言語論と論理学の哲学的基礎』1972ポ訳

3　O pytaniu i jego trafności.「問いとその有効性について」

1929

1　Bemerkungen zum problem Idealismus-Realismus. Festschrift, E. Husserl zum 70. Geburtstag gewidmet. J. f. ph. u. phän. F. Ergänzungsband. Halle

2　Badania marbuskie nad obrazami ejdetycznymi.「形相像のマールブルク学派の研究」

1930

1　Psycho-fizjologiczna teoria poznania i jej krytyka.「心生理学的認識論とその批判」

1931

1　Das literarische Kunstwerk. Eine Untersuchung aus dem Grenzgebiet der

Ontologie, Logik und Literaturwissenschaft. Halle 『文学芸術作品論』1960ポ訳

2 Niektóre założenia idealizmu Berkeleya.「バークレー観念論のいくつかの前提」

3 O nazwach i wyrazach funkcyjnych.「名辞と機能語について」

1933

1 Zagadnienie tożsamości dzieła muzycznego.「音楽作品の同一性の問題」

2 Logistyczna próba ukształtowania filozofii.「哲学建設の論理学的試み」

3 Formy obcowania z dziełem literackim.「文学芸術作品とのかかわり方」収『美学研究三巻』1970

1935

1 Vom formalen Aufbau des individuellen Gegenstandes. Studia Philosophica vol. 1 Leopoli

2 VIII Kongres Filozoficzny w Pradze.「プラハ第8回哲学会議」

3 Człowiek i jego rzeczywistość.「人間とその現実」収『文学の哲学素描』1947. 更に収『人間論小冊子』1972

1936

1 Główne tendencje neopozytywizmu.「新実証主義の主流」収『現代哲学研究』1963

2 Czy zadaniem filozofii jest synteza wyników nauk szczegółowych?「哲学の課題は個別諸科学の成果の綜合か」

3 Analiza zdania warunkowego.「条件文の分析」収『言語論と論理学の哲学的基礎』1972

1937

1 O poznawaniu dzieła literackiego.『文学作品認識活動論』収『美学研究一巻』1957 更に改訂増補 Vom Erkennen des literarischen Kunstwerks. 1968 ポーランド版 1976

2 Działalność naukowa Kazimierza Twardowskiego.「K. トワルドフスキの学問活動」収『現代哲学研究』1963

3 Der Mensch und die Zeit.

4 O psychologii i psychologizmie w nauce o literaturze.「文学における心理学と心理学主義について」

1939

1 Główne linie rozwoju poglądów filozoficznych Edmunda Husserla.「E. フッサールの哲学観の主要発展路線」収『現代哲学研究』1963

1945

1 O budowie obrazu.「絵画の構造」

2　O poetyce.「詩学論」 収『美学研究一巻』1957

1946

1　O budowie obrazu. Szkic z teorii sztuki.「絵画の構造，芸術論素描」 収『美学研究二巻』1958

2　O dziele architektury.「建築作品について」 収『美学研究二巻』1958

3　Esencjalne zagadnienie formy i jej podstawowe pojęcia.「形相の本質的問題とその基本的概念」 収『世界の存在をめぐる論争二巻』1948

4　Człowiek i czas.「人間と時間」 収『人間論小冊子』1972

5　O różnych rozumieniach 〈prawdziwości〉 w dziele sztuki.「芸術作品における〈真理性〉の様々な理解について」 収『文学の哲学素描』1947　更に，収『美学研究一巻』1957

1947

1　Spór o istnienia świata. t. 1『世界の存在をめぐる論争一巻』

2　Szkice z filozofii literatury. t. 1『文学の哲学素描一巻』 二巻出版されず。

3　O poznawaniu cudzych stanów psychicznych.「他者の心理状態の認知について」

4　Le temps, l'espace et le sentiment de la réalité.

5　Quelques remarques sur le problème de la relativité de valeurs.

1948

1　Spór o istnienie świata. t. 2『世界の存在をめぐる論争二巻』

2　Z dziejów teorii dzieła literackiego. Uwagi na marginesie poetyki Arystotelesa.「文学芸術作品史より，アリストテレス詩学覚書きノート」 収『美学研究一巻』1957

3　Uwagi o względności wartości.「価値の相対性についての覚書き」

4　Krytyczne uwagi o poglądach fonologów. Cz. 1. Z dziejów teorii języka XX wieku.「音声学者の見解にたいする批判的覚書き。一部 20世紀言語史より」「同二部」収『言語論と論理学の哲学的基礎』1972

5　Metodologiczny wstęp do teorii poznania.「認識論への方法論的入門」

6　Zagadnienie przypadku.「偶然性の問題」

7　Quelques remarques sur la relation de causalité.

1949

1　Ze studiów nad zagadnieniem formy i treści dzieła sztuki.「芸術作品の形式と内容の問題研究」 収『美学研究二巻』1958

2　O sądzie warunkowym.「仮言判断について」 収『言語論と論理学の哲学的基礎』1972

3 O słowie jako składniku określonego języka.「言語の構成要素としての語について」

1950

1 Kritische Bemerkungen zu Husserls Cartesianischen Meditationen. E. Husserl: Gesammelte Schriften Bd. 1 Haag

1951

1 O możliwości i warunkach jej zachodzenia w świecie realnym.「実在世界における可能性とそれの発生条件について」

1955

1 O tłumaczeniach.「翻訳論」 収『言語論と論理学の哲学的基礎』1972

1957

1 Studia z estetyki. t. 1 『美学研究一巻』Dzieła Filozoficzne 哲学選集 I

2 La valeur esthétique et le probléme de son fondement objectif.

3 Kant Immanuel: Krytyka czystego rozumu. 翻訳カント『純粋理性批判』1, 2巻

1958

1 Studia z estetyki. t. 2 『美学研究二巻』哲学選集 II

2 Bemerkungen zum Problem des ästhetischen Werturteils. 収 Erlebnis, Kunstwerk und Wert. 1969

1959

1 Von den Funktionen der Sprache im Theaterschauspiel. 収 O dziele literackim.『文学芸術作品論』1960

2 Über den transzendentalen Idealismus bei E. Husserl. 邦訳「エドムント・フッサールにおける超越論的理念論について」 収『フッサールと現代思想』せりか書房 1972

3 Le problème de la constitution et le sens de la reflexion constitive chez E. Husserl.

1960

1 O dziele literackim. Badania z pogranicza ontologii, teorii języka i filozofii literatury.『文学芸術作品。存在論，言語論，文学の哲学の境界領域の研究』 哲学選集 III 1931, 1のポ訳 付論「演劇における言語の機能」

2 Das literarische Kunstwerk. 2. verbesserte und erweiterte Auflage. Anhang: Von den Funktionen der Sprache im Theaterschauspiel.

3 Spór o istnienie świata. t. 1 『世界の存在をめぐる論争一巻』哲学選集 IV

4 O tak zwanym malarstwie abstrakcyjnym.「いわゆる抽象絵画について」 収

Przeżycie — dzieło — wartość.『体験，作品，価値』1966 更に収 Erlebnis, Kunstwerk und Wert. 1969 収『美学研究三巻』1970

5 O zagadnieniu percepcji dzieła muzycznego (Fragment).「音楽作品の知覚の問題」収『体験，作品，価値』1966 収『美学研究三巻』1970

6 Note sur l'objet de l'histoire de la philosophie.

7 L'homme et la nature.

1961

1 Spór o istnienie świata. t. 2『世界の存在をめぐる論争二巻』哲学選集 V

2 Zasady epistemologicznego rozważania doświadczenia estetycznego.「美的体験の認識論的考察の原理」収『体験，作品，価値』1966 収『美学研究三巻』1970

3 Nature humaine.

1962

1 Untersuchungen zur Ontologie der Kunst: Musikwerk. Bild. Architektur. Film.

2 Prinzipien einer erkenntnistheoretischen Betrachtung der ästhetischen Erfahrung.

3 Исследования по эстетике. Москва 主要美学論文のロシア版

4 Bemerkungen zum Problem der Begründung.

5 Le mot comme élément d'une langue.

6 Poëtik und Sprachwissenschaft.

1963

1 Z badań nad filozofią współczesną.『現代哲学研究』哲学選集 VI

1964

1 Time and Modes of Being.『世界の存在をめぐる論争一巻』の抄訳

2 Der Streit um die Existenz der Welt. Bd. 1 Existenzialontologie.

3 Husserls Betrachtungen zum Konstitution des physikalischen Dinges.

4 W sprawie budowy dzieła literackiego. Profesorowi Markiewiczowi w odpowiedzi.「文学芸術作品の構造の問題。マルキェヴィッチ教授に答える」収『美学研究三巻』1970

5 Artistic and Aesthetic Values. 収『体験，作品，価値』1966

1965

1 Der Streit um die Existenz der Welt. Bd. II/1 Formalontologie. 1 Teil. Form und Wesen.

2 Der Streit um die Existenz der Welt. Bd. II/2 Formalontologie. 2 Teil. Welt

und Bewusstsein.

3 Zagadnienie systemu jakości estetycznie doniosłych.「美的に重要な系の問題」収『体験，作品，価値』1966 収『美学研究三巻』1970

1966

1 Przeżycie — dzieło — wartość.『体験，作品，価値』

2 Werte, Normen und Strukturen nach René Wellek.

3 Einige ungelöste Problem der Werttheorie.

1967

1 O poznáváni literárniho dila. Praha.『文学作品認識活動論』1937のチェコスロバキヤ版。

2 Betrachtungen zum Problem der Objektivität. 収『認識論基礎一部』1971ポ訳

3 Człowiek i przyroda. 収『人間論小冊子』1972

1968

1 Vom Erkennen des literarischen Kunstwerks.『文学作品認識活動論』1937の著しい増補

2 Fenomenologia dell' opera letteraria.『文学芸術作品論』1965三版のイタリヤ版

3 Sprawa stosowania metod statystycznych do badań dzieła sztuki.「芸術作品研究に統計的方法を適用する問題」収『美学研究三巻』1970

4 Briefe an Roman Ingarden(E. Husserl). Mit Erläuterungen und Erinnerungen am Husserl hrsg. vom Roman Ingarden.

1969

1 Erlebnis, Kunstwerk und Wert. Vorträge zur Ästhetik 1937—1967

2 Z rozważań nad wartościami moralnymi.「道徳的価値についての考察」

1970

1 Über die Verantwortung. Ihre ontischen Fundamente. 収『人間論小冊子』1972ポ訳

2 Innføring I Edmund Husserl Fenomenologi. Oslo 1967年オスロ講演「フッサール現象学入門」のノルウェー版

3 Studia z estetyki. t. 3『美学研究三巻』哲学選集 VII

4 Co jest nowego w ostatniej pracy Husserla?「フッサールの最後の著作における新しいものは何か」

5 Künstlerische Funktionen der Sprache. Ein Ausblik.

1971

1 U podstaw teorii poznania. Część pierwsza.『認識論基礎一部』二部は死で未完。

哲学選集 VIII

2 O САЗНАВАЊУ КЊИЖЕВНОГ УМЕТНИЧНОГДЕЛА. Beograd『文学作品認識活動論』1968のユーゴスラヴィア版

3 Die vier Begriffe der Transzendenz und das Problem des Idealismus bei Husserl.

1972

1 Z teorii języka i filozoficznych podstaw logiki.『言語論と論理学の哲学的基礎』哲学選集 IX

2 「エドムント・フッサールにおける超越論的理念論について」 収『フッサールと現代思想』せりか書房

3 Filozofia E. Husserla.「E. フッサールの哲学」

4 Książeczka o człowieku.『人間論小冊子』

5 Max Bense und das Problem der Anwendung statischen Methoden in der Literaturforschung.

1973

1 The Literary Work of Art. An Investigation on the Borderlines of Ontology, Logic, and Theory of Literature.『文学芸術作品論』の英語版

2 The Cognition of the Literary Work of Art.『文学作品認識活動論』の英語版

3 Utwór muzyczny i sprawa jego tożsamości.「音楽的創造とその同一性の問題」『美学研究二巻』1958からの抄録

4 A priori knowledge in Kant vs. A priori knowledge in Husserl.『認識論基礎一部』からの抄訳

1974

1 Wstęp do fenomenologii Husserla.『フッサール現象学入門』 オスロ講演（1967）哲学選集 X ドイツ語講演のポ訳

2 Über die kausale Struktur der Realen Welt. Der Streit um die Existenz der Welt. III ポ版準備中

1975

1 On the Motives which led Husserl to Transcendental Idealism.『現代哲学研究』の O motywach, które doprowadziły Husserla do transcendentalnego idealizmu. の英訳

1976

1 O poznawaniu dzieła literackiego.『文学作品認識活動論』1968のポ版 哲学選集 XI

2 Det litterara konstverket Med ett supplement om funktionerna hos språket i teaterskådespelet. Lund 『文学芸術作品論』のスウェーデン版

3 Gegenstand und Aufgaben der Literaturwissenschaft. Aufsätze und Diskussionsbeiträge (1937—1964)

1977

1 Az irodalmi müalkotás. Budapest.『文学芸術作品論』のハンガリー版

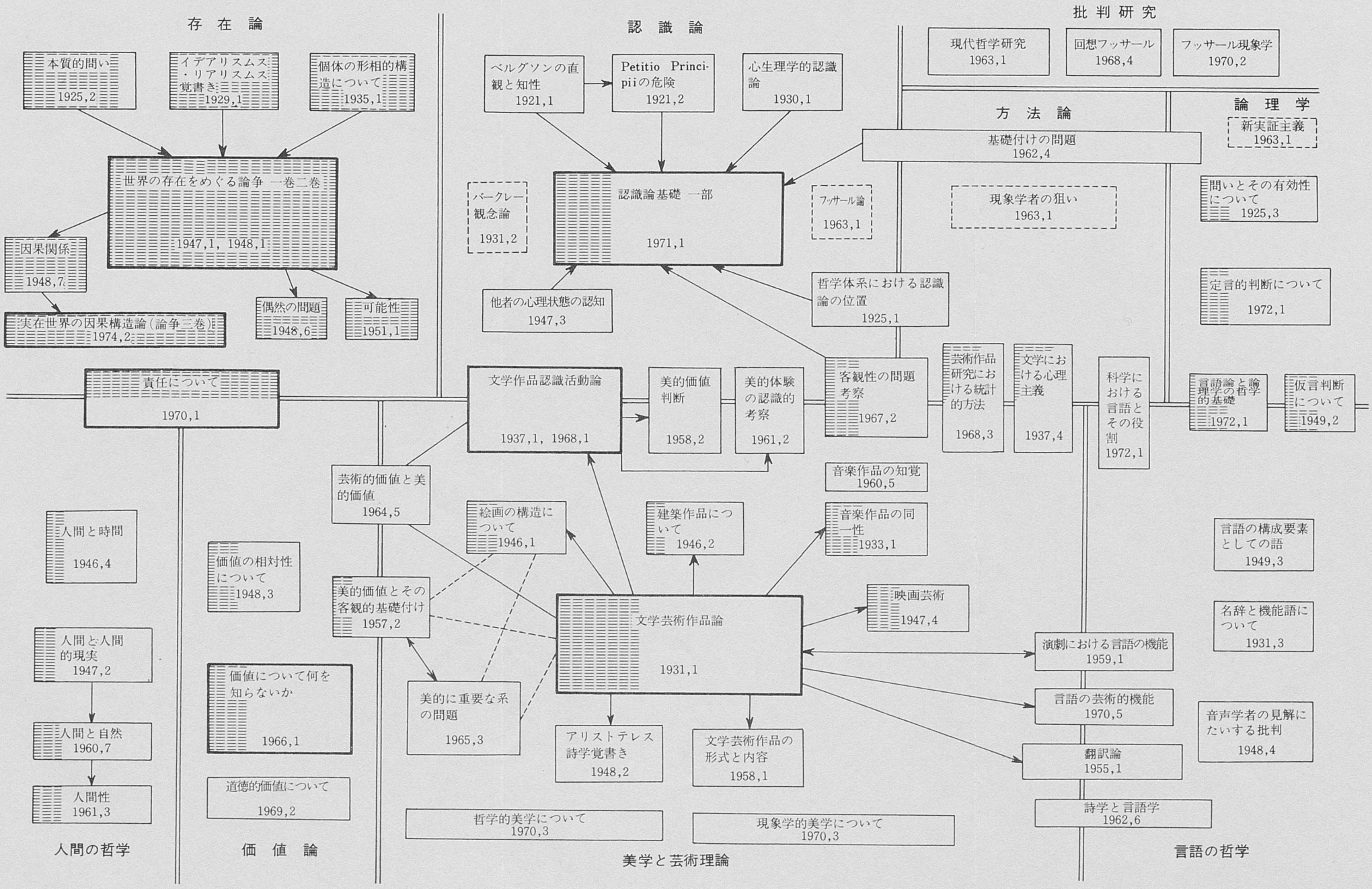
ロマン・インガルデン哲学選集

I 『美学研究一巻』1957, 1
II 『美学研究二巻』1958, 1
III 『文学芸術作品論』1960, 1
IV 『世界の存在をめぐる論争一巻』1960, 3
V 『世界の存在をめぐる論争二巻』1961, 1
VI 『現代哲学研究』1963, 1
VII 『美学研究三巻』1970, 3
VIII 『認識論基礎一部』1971, 1
IX 『言語論と論理学の哲学的基礎』1972, 1
X 『フッサール現象学入門』1974, 1
XI 『文学作品認識活動論』1976, 1
XII 『世界の存在をめぐる論争三巻』印刷中 1974, 2

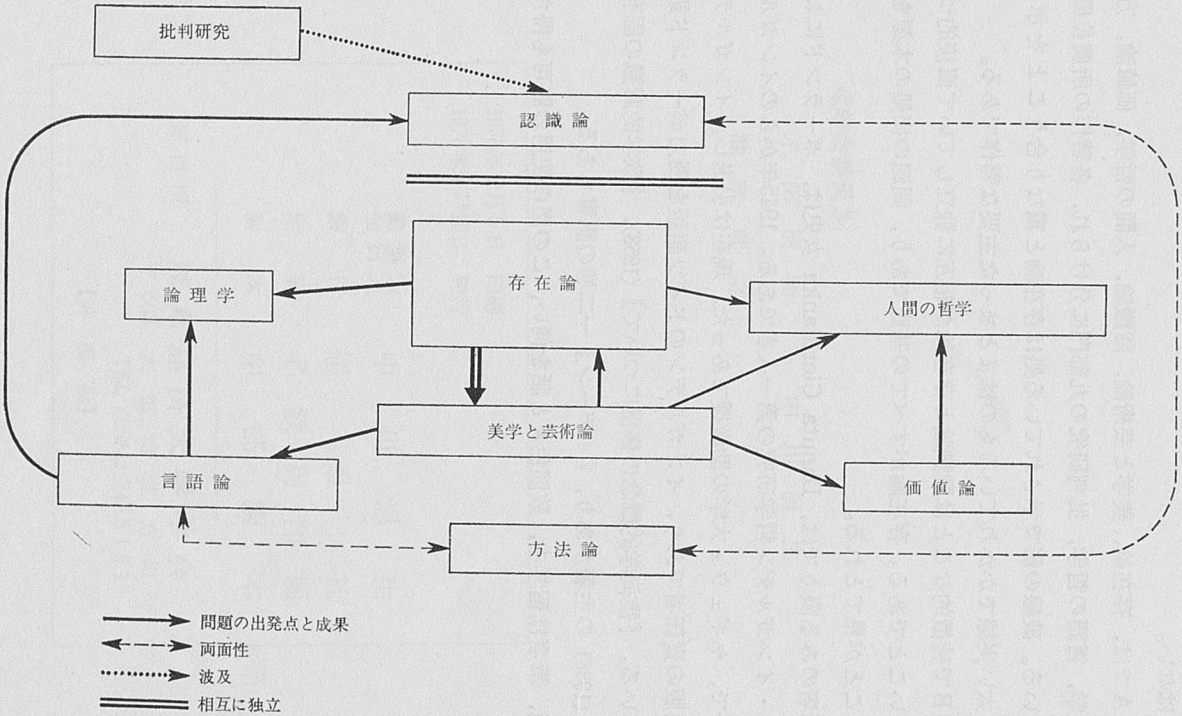
3 D. Gierulanka 女史のインガルデン哲学の概略図

ここに取り上げた二葉の図は，インガルデン哲学著作の全容を一瞥するのにまたとないすぐれたものである。この図は最初，Fenomenologia Romana Ingardena. 1972 に載った論文 Filozofia Romana Ingardena——próba wniknięcia w sturukturę całości dzieła——のものであるが，最近，筆者のもとに送られて来た論文 The Philosophic Work of Roman Ingarden (A Systematic Outline) 〔in „Dialectics and Humanism" Vol. IV No. 4〕の図を用いた。今回の図には若干の変更が見られるが，部分的で全体的基調には

A　インガルデン哲学の各部門別にみる著作の帰属図



B　インガルデン哲学の各部門別の連関図



変更はない。

図Aでは，存在論，美学と芸術論，認識論，人間の哲学，価値論，方法論，論理学，言語の哲学，批判研究の九部門に分けられ，各著作の所属位置が示されている。破線の影で示されている処は存在論と重なり合うことを示している。太い実線でかかれているものはまとまった主要な著作である。

図Bで特徴的なことは認識論と存在論が相互に独立していて直接的つながりがないことである。存在論がすべての基底であり，問題の出処の本源をなしていることが見てとれる。

筆者のみる限りでは，Danuta Gierulanka 女史は，ポーランドにおけるロマン・インガルデン哲学研究の第一人者である。1945年からのインガルデンの弟子で，ヤギェウォ大学の助教授であった。現在は引退し，インガルデンの死後出版の責任者であり，インガルデンのドイツ語版を極力ポーランド語に翻訳している。『幾何学的概念の修得について』(1958)，『数学的認識の固有性の問題』(1958) の主著があり，『イデーン』一二巻の訳書もある。

尚，筆者は留学中，数回色々と話を伺い，この図の使用の許可も得た。